

## 第2 教育研究団体の意見・評価

### ① 日本地理教育学会

(代表者 池 俊介 会員数 約500人)

T E L 042-329-7729

## 地 理 A

### 1 前 文

2020年1月に大学入試センターから出された問題作成方針によると、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善のメッセージ性、社会生活や日常生活の中から課題を発見し解決方法を構想する場面など、学習過程を意識した場面設定を重視することが挙げられている。また、地理の問題作成方針では、多面的・多角的に考察する過程を重視することが挙げられている。具体的には、思考の過程や様々なスケールから捉えること、知識をもとに推論すること、資料をもとに検証すること等が述べられている。これらの観点を踏まえ、評価する。

### 2 試験問題の程度・設問数・配点・形式等

第1問 地理的技能の活用と日本の自然災害と防災に関する大問である。正距方位図法の読み取りや地理院地図より作成した陰影起伏図、メッシュマップ、写真を用いた設問などがあり、いずれの問題も基本的な知識や技能を問うもので、難易度は標準的である。

問1 正距方位図法の地図の用い方に関する基本的な問題である。図の中心からの距離と方位が正しいことを理解していれば適当でないものは容易に導き出せる。中心から離れるにつれ形や面積の歪みは大きくなり、外周円は対蹠点、つまり地球の裏側であり、地球の全周約4万kmの半分の2万kmが外周円の半径であることは容易に分かる。基本的な問題である。

問2 地形の起伏から自然堤防であると判断できる。その特徴として、集落や畑が多いことを想起できれば、解答は容易に導き出せる。Kは旧河道であるが、指し示す位置を少しずらして、凹部にあることが容易に分かるよう示した方が親切である。

問3 二つの地形図の等高線から尾根や谷、標高や傾きを読み取らせるとともに、道路と集落の位置関係を読み取らせる問題である。本問では尾根と谷の判断ができるかが問われている。基本的な問題であるが、等高線の読み取りに偏っているため、二つの地形図を見比べる、地図記号について問う、縮尺の異なる地形図を並べ特定の距離や面積を比較させるなどの選択肢も取り入れて、広く地形図に関する知識を問う問題も考えられる。

問4 大問1の中で唯一、地図や図表を用いていない問題であるが、地震発生のメカニズムと防災についての基本的な理解を問う問題である。本問では緊急地震速報を理解できているかが問われているが、意外にも、新設の「地理総合」に緊急地震速報が取りあげられていない。気象庁のホームページでは「地震の発生直後に、各地での強い揺れの到達時刻や震度、長周期地震動階級を予想し、可能な限り素早く知らせる情報」と示されている。

問5 海に面した地域の地形の起伏を参照して、液状化、河川による洪水、地震の揺れの地図を判断する問題である。河川の流れに沿った地域で標高の低いところでは河川による洪水が多く見られる可能性が高いと考え、液状化は限定される一方、地震の揺れは広範囲に及ぶことが分かれば正解は導き出せる。地形の起伏と3つのメッシュマップの判読にはやや時間を

要するが、地理的技能を測る上では必要な問題であり、良問といえる。

問6 自然災害に対する備えに関する景観写真の読み取りの問題である。写真サは雁木、写真シは防風林に囲まれた散村、写真スは輪中であろう。雁木は近年の小中学校の教科書でもあまり取りあげられなくなったが、防風林と輪中から解答を導き出せる。

第2問 世界の生活・文化に関する大問である。写真、地図が多用されており、特に写真の判読は、その特徴を捉えながら解答を見出していく形式を採っている。基礎的な知識をベースに、解答には思考力・判断力が求められる問題形式となっている。問題の難易度は、標準的なレベルである。

問1 地図中の各地域と、その地域で行われている伝統的な楽器の演奏や儀式の様子を組み合わせて選ぶ問いである。地図中の気候が理解できれば、服装などの特徴を読み取り、解答することが可能である。気候も緯度の大きく異なる3地点が選ばれており、解答は容易である。

問2 アイルランドとアラスカで見られる住居の特徴を説明した文から、適当でない箇所を選ぶ問いである。高緯度地域の降水量の特徴や永久凍土地帯の家屋の特徴が理解できているかがポイントである。高床式の住居は高校の教科書や資料集にも掲載されている事例であることから、解答は容易である。

問3 アフリカにおける宗教分布と、かつて行われていた交易の際に影響を与えた風の名称を解答する問いであり、いずれも基本的な知識を問うものである。交易に影響を与えた風の名称の解答は容易であり、宗教の割合も、北部にイスラームが多いなどの基礎的な知識があれば、歴史的背景が理解できていなくても解答は容易である。

問4 異文化が入ってくることにより、新しい文化に発展する事例としての写真の読み取りの問いである。植民地支配や移民などにより、食文化が広がり、新たに生まれたりすることがある。パンの形状からフランス由来であることは容易に判断できる。写真はバインミーで、フォーと同様にベトナム庶民のファストフードとして日常的に食べられている。調味料はヌクナム（魚醤）で、タイのナンプラーなどととともに、東南アジア周辺の特徴的な調味料である。なお、高温多湿な東南アジアではトマトの煮込み料理はあまりみられない。

問5 イギリス、スペイン、ドイツに来訪する外国人観光客の特徴の違いを捉える問いであり、延べ宿泊者数の国別上位3国が示されている。アメリカ合衆国との関係やアクセスのしやすさ、また、スペインがヨーロッパの中でも比較的物価が安く、温暖で多くの観光地があることから国際観光収支はプラスである、という知識があれば解答にたどりつくことが可能である。ただ、相互関係を考える必要から、時間はやや要するだろう。良問といえる。

問6 時差を利用した経済・余暇活動に関する事例から適当でないものを選ぶ問いであり、この大問の中で唯一図表がない問いである。北京オリンピックの放映時間が分かっているにもかかわらず、他の選択肢の内容が正しいかが分かるため、解答は困難ではない。

第3問 東南アジアに関する大問である。昨年度は本試験・追試験ともに地理総合を意識した探究型学習を想定した出題だったが、本年度は本試験・追試験ともにその要素は見られなかった。図表や主題図、航空写真などの読み取りを通じて、地理的技能や思考力を問う問題から構成されているが、知識を問う要素が多く、良問が少ない点は改善してもらいたい。易しめの問題から難しめの問題までであるが、大問全体で見れば標準的なレベルの問題である。

問1 気候に関する問題。赤道との距離、気候と植生とのかかわりを把握していれば解答できる平易な問題。2段階で考えさせる流れは、共通テストとして定着してきたように思える。

問2 地形とその活用に関する文章の正誤問題。問われている内容は教科書レベルの知識で、易しめの問題である。出題形式・方法にもう一工夫欲しい。

- 問3 農業景観に関する問題。写真の読み取りから農作物を考えさせ、栽培地域を判定させる地理的思考力を問う良問。その写真がコーヒーであるのを読み取るのが厳しいかもしれず、写真の選定を熟慮してほしい。また、図中の標高に関する着色を生かす工夫（例えば棚田を問う）が欲しかった。標準的なレベルの問題である。
- 問4 宗教に関する問題。祝祭日から考えさせるのは、目新しさを感じさせる。やや易しめのレベルの問題である。
- 問5 資源と産業に関する問題。②と④の高位がほぼ同じで判定しにくいほか、各指標と図の判定においても細かな知識が問われ、解答に時間を要する受験者が多かったと思われる。
- 問6 輸出依存度と人口に関する問題。カンボジア・マレーシアとタイ・ベトナムの人口数のイメージを把握できている受験者は多くないと思われる。標準的なレベルの問題である。
- 第4問 発展途上国や先進国の都市への人口集中とそれに伴う課題についての探究活動をもとにした大問である。設問ごとに探究のテーマや考察の視点が示され、目的をもって問題に取り組むことができる。前半では、途上国と先進国という視点から「違い」や「事象の背景」について探究している。後半は、「取組」「対策」など「解決策」について考察している。ゆえに、普段の授業において、社会問題の発生要因とそれへの取組や有効な解決策を考える機会を持つ必要がある。図表の読み取りとその背景、模式図からの具体的事象への思考や様々な取組の効果など、基礎的知識をもとに地理的な見方・考え方を働かせる思考力・判断力を問う問題も多く見られた。
- 問1 従来からよく見られる形式の問題である。先進国や新大陸では都市人口率が高くなること、タイでは首位都市（プライメイトシティ）が見られることの基礎的な知識や概念を問うことができている。「都市への人口集中の状況が発展途上国と先進国で異なることを考えるため」という目的があるため、それに応える形の内容があるとより良い問題になると考えられる。
- 問2 日本の大都市圏において、どの段階のどの場所でどのような問題が発生するのかについて問うた問題である。左から順に、中心都市に人口集中、都市域の拡大・スプロール現象、ドーナツ化現象、都心回帰現象を示している。都市の発達に関する時間軸と場所に関する概念的理解が必要で、思考力を問う良問と言える。
- 問3 都市への人口集中が進む背景について、マニラと東京の大都市圏と大都市圏以外の地域の人口推移について資料を基に考察する問題である。東京大都市圏内の周辺地域の人口増加率が小さくなっている背景、マニラ大都市圏の中心都市の人口増加が大きくなっている背景や、マニラ大都市圏の今後の展望について考察させている。資料を用いて都市を複数の視点から考察することに加え、既有知識を用いて変化の背景や展望まで考察させており、地理的な思考力を問うた良問と言える。
- 問4 都市における交通渋滞解消のための取組について正しいものを選ぶ問題である。③が温室効果ガス排出量削減の取組であることは容易に判断することができる。普段の学習から解決策を取りあげて、それがどのような意味や効果を持つのかについて考えておく必要がある。
- 問5 ジャカルタにおける交通渋滞と対策をテーマに、2つの資料を用いて考察する問題である。選択肢①、③は資料の読み取り、②と④は一般的な知識で分かり、図表の読み取りと知識を問うている。テーマである「なぜ交通渋滞が発生し、どのような対策が有効であるか」についてそれぞれの資料に基づいた具体的な考察があると、資料から問題点を分析し対策を考えさせる問いになるのではないか。
- 問6 発展途上国の都市問題発生要因をテーマに、農村側の要因と都市問題を考察する問題で

ある。問われている事項は基礎的な知識であり、解答は容易である。大問の最後の設問であり、まとめとより広い視点から考察を行ったという意図は読み取れる。大問の構成として、解決に向けた取組や今後の展望についてここで問うても良いと考える。しかし、最後にまとめを行っており、探究ベースで大問を構成しようとしている点は新課程にもつながるものである。

第5問 高知県須崎市周辺を事例とした地域調査に関する大問である。調査のプロセスに沿いながら複数の項目に関連する地図や写真、統計などの資料を読み取り、その結果を複数の選択肢と関わらせながら解答を見出していく形式を採っている。地理的な知識よりも常識的なそれに基づいた上での資料読解力と、最適解を考えるための思考力・判断力があれば、解答可能な良問である。

問1 高知県と香川県から東京都、愛知県、大阪府、福岡県への公共交通機関別（航空、鉄道、バス）旅客数について示されたグラフを考察する問題である。①の選択肢か②のそれかで解答に迷いが生じるが、出発地と目的地との間の近接性やインフラ整備の状況などからそれに相応しい交通手段を判断すれば、解答は可能。基礎的知識を踏まえた上で解答できる良問といえる。

問2 須崎市周辺の地図と鳥瞰的な航空写真から複数の地点における地形の特徴について考察する問題である。写真から須崎湾が山地間の谷に海水が入り込む沈水地形であることが理解できる。沈水地形は水深があるゆえ、砂州の形成はあり得ない。

問3 ニホンカワソウの絶滅要因を切り口に、須崎港周辺の新旧地形図と1936～2017年にかけての地域の変遷について記された文章を対比する問題である。地図と文章とを比較検討し、丁寧に読み解いていけば、正答は容易に引き出せる。思考力・判断力を重視する良問である。

問4 ミョウガ、キュウリ、ショウガ、ナスそれぞれの作付面積と産出額、ミョウガの入荷量と市場価格の年間推移を切り口に、須崎市と高知県の農業の現状について考察する問題である。表やグラフが示していることを、各選択肢に示されている文章に当てはめ、その真偽について判断することができれば、解答は容易である。

問5 須崎市周辺で見られる津波対策へ向けた事例をとらえた4枚の写真とその使用目的について考察する問題である。①の河川河口部にある水門への避難行動は安全性という点からあり得ない。このことに関連して、自然災害が発生した際に、私たちは、いかなる行動をとるべきなのかを日頃から考えておく必要がある、そのための地域コミュニティのあり方や対策などについて意識しておく必要がある。その意味から本問は良問といえる。

問6 在来種のカモシカと外来種のアライグマの生息分布を示した主題図より生物多様性を維持するための方策について考察する問題である。「アライグマがペットとして持ち込まれた」という会話文から、都市部に近い場所に生息分布が見られることは判断できる。また、野生生物であるカモシカの生息分布は、人間の居住空間と離れた山村部において見られることも判断できる。下線部bの「人間が自然への働きかけによって長らく保たれてきた」という文章の意味を正しく理解できれば、XとYのどちらの取組が該当するのか自ずと判断できる。

### 3 総評・まとめ

出題内容は、「地理A」の範囲として適当であり、逸脱したものはなかった。出題分野も、自然環境、生活文化、地誌、都市、地域調査とバランスがとれており、大問の流れも適当であった。難易度は高くなく、平易なものが多かった。リード文は長い、一つ一つの問題は短時間で解くことが

でき、時間が余った受験者も多いだろう。

ただ全体として、問題作成方針に合致していないような印象を受けた。センター試験との変化があまり感じられず、一問一答の単純な知識問題として答えられるものも多くあった。形式的には組合せ的な出題も見られたが、思考の段階を増やすというよりも、複数の単純な選択問題を一まとめにしただけのように感じられた。つまり、学習過程を意識した場面設定が重視されていたと思える問題が少なかったのが残念である。第4問・第5問が比較的この意図に沿うような内容ではあったが、もう一工夫ほしいところである。

#### 4 今後の共通テストへの要望

共通テストになってから、写真や図が多く使われるようになった。地理院地図などGISを利用した出題がみられるようになった点は評価したいが、第1問の図2・図4、第3問の写真1のように濃淡の加減で見づらいものが複数あった。受験者にとって、判読しやすい写真や図の提示が求められる。

大学入試センターは新しい方向性を示しつつ、現場の実情を考慮しながら入試作成を進めてきたように感じる。2022年度より新しい学習指導要領が実施され、地理総合がスタートした。第1問の間4のように、「防災」を意識した問題はあるものの、問い方として生徒の思考力を問うような内容にはなっていなかったのが残念である。地理総合の出題は「地理A」の流れを受けたものになると思われる。今後に期待したい。

## 地 理 B

### 1 前 文

共通テストとして3回目の試験を迎えた。今年度から「地理総合」が必修化され、高校生にとって地理の学習がより身近になるとともに、世界をとりまく状況が大きく変化し、地理的なものの方・考え方がますます重要になってきている。こうして、社会から求められる教科・科目像が変化する中で、従来の基礎・基本的な設問と、現代に即した諸課題を題材とした設問が、どのようにバランス良く配分され、さらに出題方法等に工夫がみられるのかについて、設問個々の分析と評価を行った。なお、今年度の出題構成は大問5、小問30で、前年と変化はなかった。出題内容についても、昨年とほぼ同様の構成であった。

### 2 試験問題の程度・設問数・配点・形式等

第1問 世界の自然環境や災害に関する大問である。気候、地形といった単純な自然環境だけでなく、人間の生活と結び付けて考える問いが多く、知識に加え、解答には思考力も必要になる問いが多く、良問と言える。一方で河川に関する問いが多く、やや偏りを感じる。気候と地形のオーソドックスな問いを混ぜ、バランスよく出題してほしいと感じた。問題のレベルとしては、総合的な知識と思考力が必要なことから、やや難といえる。

問1 地図中の4地点の年降水量、最少雨月、最少雨月の降水量から、1地点を解答する問いである。4地点がほぼ同緯度であることから、風の影響などのイメージが付けば、解答が結びつく。雨温図に慣れている受験者にとっては、やや難しいかもしれない。

問2 中央アフリカの内陸河川の流れる方向と環境問題を解答する問いである。内陸河川の流れる方向の解答にはこの地域の地形や気候を理解している必要があり、アフリカになじみの薄い受験者にとっては難問であるように思う。環境問題に関してはサハラ南部の砂漠化の問題と関連することから、解答は容易である。

問3 アペニン山脈、グレートディヴァイディング山脈、スリランカ高原の長期間と短期間の侵食速度の特徴とその理由を捉える問いである。地殻変動や降水量、人為的要因の森林破壊など多岐にわたる知識から判断をする問題であり、良問と言える。ただし、地名のみから解答するため、それぞれの場所を知っている必要がある。3地域が地図で示されている方が、受験者にとっては解答しやすいように感じる。

問4 東南アジア周辺海域の熱帯低気圧の移動経路に関する問いである。熱帯低気圧は、赤道付近（南北緯度5度程度まで）で発生することが少なく、また赤道を跨ぐことはない（ほとんど存在しない）ため、赤道の位置を理解していることが重要である。赤道の位置と熱帯低気圧発生の特徴さえ理解できていれば、解答は容易である。

問5 日本国内の3地点の流量の年変化を問う問いである。日本の河川は、短く、急であるため、降水量が流量に反映されやすい。また積雪量が多い地域では、雪解けを考慮する必要がある。短期間で多くの降水量をもたらす台風、梅雨、そして雪解けに着目することが出来れば、解答は非常に容易である。河川の流路、流量に関する問いが、この大問に3問あるので、多いような気がする。この問いが、3問の中でもっともオーソドックスであり、知識や思考力を問うには、最も良問であるといえる。

問6 河川とその周辺の地形から、災害の発生リスクを問うものである。自然環境の理解から防災・減災を考えることは重要とされており、解答には、基本的な知識に加え、思考力・判

断力を要する良問であるといえる。災害のリスクに関しては、土砂災害と浸水のいずれかからの判断であり、河川に起因するものか、地形に起因するものかで判断がつく。4つの地形が、河川とどのような関係かという知識があれば、解答は容易である。ただし、地形に関する問いがこの1問しかないのが、やや残念である。

第2問 世界の資源と産業に関する大問。図表が多く用いられており、一つ一つ丁寧に読み取る力が求められる。単に知識を問うのではなく、多面的に地理的事象を読み取らせようとする姿勢は評価できるが、全体的な難易度は高くない。

問1 缶詰に利用される金属について、アルミニウムと粗鋼の生産国およびそれら原料の主産地を分布図から判読する問題。センター試験でよく出題されていた「鋳工業」に関する基本的な問題であるが、一問一答ではなく、生産物とその原料の組合せを総合的に判断させる問題であり、共通テストらしい問題と言える。

問2 ツナ缶詰に関し、生産量・輸入量の分布図を参考に適切な文章を選択する問題。センター試験でも、「缶詰」が主な題材として出題されたことはなく、この問題によって、日本発祥のツナ缶が今これだけグローバル化していることに気付かされたかもしれない。初見の問題ではあるが、原料のカツオ・マグロが暖流性の魚であることと、分布図を正確に読み取ることができれば、解答は容易である。面白いテーマであり、「地理総合」を意識した良問と言える。

問3 2つの地域の漁獲量と養殖生産量の推移を読み取る問題。ペルー沖と東南アジアの比較であり、それぞれ漁業においては、特徴のある海域である。ペルー沖はエルニーニョ・ラニーニャの影響による漁獲量の大きな変動、東南アジアはエビの養殖の増加、といった基本的な知識があれば、判読も容易である。

問4 米の栽培カレンダーに関する問題。小麦の栽培カレンダーはよく目にするが、米のカレンダーは初見となる。米の栽培条件、4か国の位置、降雨時期、といった複数の知識の組み合わせにより、解答を導くことができる。地理的な考え方を問う、良問である。

問5 世界の穀物の輸出入に関する問題。各地域の穀物の輸出量・輸入量を、現在と約20年前の2つの年代で比較する。指標として挙げられているアフリカやオセアニアを参考に、北アメリカが20年前には既に「世界のパンかご」となっていたことを理解していれば、判読は容易である。年代が2つ示してあるが、おそらく最近のものだけでも判断は可能である。せっかく2つの年代を挙げるのであれば、そこからさらに展開させた問題にすることはできないだろうか。

問6 携帯電話と固定電話の契約数に関する問題。各々の普及時期、および組合せの3か国の経済事情、生活環境などを総合的に判断すると解答は導き出される。各々の電話の契約数の推移を年代別に表した面白い図である。地理的な技能・思考力が問われる良問である。

第3問 日本の人口や都市に関する大問。生徒の探究場面が設定されている。教科書等で一度は見たことのある図表と初見の図表が、バランスよく配置されている。そのため、基礎的な問題と初見の資料を用いた問題とで解答時間に差が出たものと予想される。初見の図表を用いた問題は、基本的な知識をもとにして地理的な技能や思考力が求められるものとなっている。

問1 日本を含む4か国の1970年と2010年の年齢別人口構成と出生率・死亡率の変化を読み取る問題である。本問は、左側に1970年、右側に2010年の年齢別人口構成を示しており、男女で示された年齢別人口構成に見慣れた受験者は少し戸惑ったかもしれない。しかし、資料1の出生率・死亡率の変化を示すグラフは教科書等で見慣れたものであり、典型的な国を当てはめていけば、十分に読み取ることができる。標準的な問題といえる。

問2 日本を含む4か国の社会増加率の推移を問う問題。4か国（日本、フランス、ベトナム、メキシコ）の時代背景をふまえた国際的な人の移動をおさえていないと、日本の判定が難しいだろう。フランスは、第二次世界大戦後、北アフリカ等の旧植民地より積極的に労働力として外国人を受け入れた。日本は、フランスに比べて外国人の受け入れの時期が遅く、社会増加率も低い②が該当する。

問3 4か国の現在の合計特殊出生率に関する説明文から誤りを含むものを選択する問題。4か国（アメリカ合衆国、韓国、シンガポール、ノルウェー）とも少子高齢化では頻出の国であり、シンガポールが資源に恵まれないという国内状況と教育環境をふまえれば、③が誤りと判別できる。基礎的な問題である。

問4 社会保障負担率と租税負担率から国名を判定する問題。デンマークが高福祉・高負担の福祉国家であることは基礎知識としてわかっているが、本問のように初見の表で出されると戸惑う生徒が多かったと思われる。社会保障負担率と租税負担率から何がわかるのか、問題文の後の補足説明がヒントとなる。4か国中、租税負担率が最も高いのが国民の税負担が多いデンマークであること、アメリカ合衆国は日本と違い国民皆保険ではないことから社会保障負担率が日本より低いことであることなど、基礎知識と関連付けて考察する力が問われる。基本的な知識をもとに思考力を問う、共通テストらしい問題である。

問5 子育て環境や出生率の日本国内の地域差に関する問題。示された3つの指標のうち、タは、平日の通勤・通学に時間がかかる三大都市圏、チは、三世同居率の高さとも関連して夫婦共働き世帯の割合が高くなる東北や北陸などの地方都市、などの基本パターンがわかれば判定しやすい。しかし、ツの単独世帯は三大都市圏や仙台市や広島市などの広域中心都市とともに、北海道や高知県なども高齢者の単独世帯が多いことを考察するのはやや難しい。基礎的な問題である。

問6 東京大都市圏内の保育所の整備状況についての図を読み取る問題。図と会話文から判定するため情報量がやや多いが、丁寧に読み解けば解答にたどり着ける。都市部の待機児童問題という時事的な問題を扱い、地図と会話文の情報を関連させて考察するという、共通テストらしい良問である。

第4問 地中海周辺の地誌に関する大問である。AとBに分かれており、Bはスペインとチュニジアの比較地誌となっている。問2や問4のように、他地域との関係性に注目しながら動的に地域を捉えさせる意図は評価できる。羅列的、平板的にまとめただけの地誌学習の実践が批判されがちな今日において、今後もこのような問題の作成をお願いしたい。難易度については標準的であるが、知識量が多ければ有利な問題がいくつかあり、受験者によって得点差が生じる大問だったのではないかと考えられる。

問1 自然エネルギー源別の発電施設の分布を判断する問題である。ラルデッロ地熱発電所やアスワンハイダムの位置を理解していなくても、「自然環境をいかして」という問題文をキーワードに、偏西風や火山の分布が理解できていれば解答でき、教科書レベルの知識で作成された問題といえる。とはいえ、知識量が多い生徒にはかなり有利に働く問題となっている。

問2 モロッコにおけるトマト栽培をもとに、生産量や輸出量、EUとの結びつきについて問うた問題である。落ち着いて考えればさほど難しくはないが、1つの図に4つのグラフが示されており、情報量が多く読み取りづらさや戸惑いを感じる受験者もいたであろう。③や④の選択肢は、用語（土地生産性）の本質や資料の読み取り方を問うており、共通テストの問題として評価できる。

問3 イスラエル、スペイン、モロッコのいずれかの完成乗用車における1万人当たり輸出量

と輸入量を判断する問題である。スペインが「ヨーロッパのサンベルト」にあり、自動車メーカーによる工場進出が多くみられることが分かればEであると判断できる。あとは、1万人当たり輸入台数を見て、イスラエルとモロッコの1人当たりGNIを比較できれば、購買力が高いイスラエルがDであると判断することができる。多角的に考察しながら思考力・判断力を問うている点で評価できる。イスラエルの1人当たりGNIが日本よりも高い高所得国家であることに対する受験者の理解度を考えれば、差がつく問題だったのではないだろうか。

問4 北アメリカ・西アジアにおけるイギリスとフランスからの観光客と国際援助額について判断する問題である。国の位置に対する理解や旧宗主国の分布、経済状況を総合して解答する問題として評価でき、配点が4点であることも妥当であると思われる。

問5 セビリアとチュニスにおける都市景観や都市形態の比較に関する問題である。イスラム圏では伝統的な都市形態が迷路型であるという理解があれば解答できる。都市形態を扱っていない「地理B」の教科書も見受けられるが、過去のセンター試験の問題傾向から、都市形態は都市に関する基本的な知識であるとなしでもよいであろう。③の選択肢は地中海性気候の知識ともかかわっており、自然地理と人文地理の視点から総合的に問うている点で評価できる。

問6 スペインとチュニジアの産業構造の変化を男女別の視点から考える問題である。問い方の形式は共通テストにおいて定着しつつあり、受験者が戸惑うことはあまりなかったものと思われる。スペインまたはチュニジアの判断は、イスラム圏で男女別の就業人口に大きな差が生じていることが理解できていれば分かる。その上で、スペインで脱工業化社会が進んでいることを読み取ればよい。また、別のアプローチとして、図から第1次産業の割合を類推しながら解答することも可能である。細かい知識を必要とせず、図から大観して考察する力を問うている点で良問といえる。

第5問 「地理A」と共通のため省略。

### 3 総評・まとめ

今年度の地理Bの出題内容および難易度設定は標準的であり、適切であったと考える。第2問では、「缶詰」をテーマにしなが、缶の素材に関する問いや、ツナ缶詰に関係した漁業に関する問いなど、生徒に興味・関心を持たせる工夫が随所で見られた。第3問では、日本の人口問題に関連して、少子化対策や待機児童問題などについて、各種資料を読ませて分析させるなど、現代社会の諸課題を強く意識した問題構成となっていた。いずれも、作問者の意欲や工夫がみられ、良問といえる。一方、従前から指摘しているように、写真の判読や図表の読み取りのためには、問題のカラー化は不可欠であり、引き続き、問題ページの一部カラー化を強く望みたい。さらに、共通テストも3回目ということもあり、出題形式については、ほぼ固まってきたと思われるが、今後、地理総合・地理探究を学んできた生徒たちが受験することになるため、新しい学びを刺激するような、意欲的な作問を期待したい。

### 4 今後の共通テストへの要望

高校の現場にとって、次年度以降の共通テストがどのような方向性で実施されるのか、とても高い関心事である。そこで、以下の諸点について、要望したい。まず、写真資料や図表のカラー化である。現行のモノクロ印刷方式と比べて、格段にコストアップは避けられないと思われるが、現代社会において、PCやスマートフォンの画面上での情報伝達が増え、各種グラフィックの精度は大きく向上している。本試験でもGoogle Earthや地理院地図が活用されているが、生徒たちはそうし

た画像をカラーで認識している。しかし、入試問題だけは、そうした流れから取り残されたままになっており、ぜひとも、喫緊の課題として議論していただきたい。次に、設問のさらなる工夫である。共通テスト1年目に出題されたような、段階をふまえて正解を導き出す設問は、2年目以降、ほとんど出題されなくなり、ほぼセンター試験時の出題形式に近いものになってしまった。今後、地理総合・地理探究を学習した生徒たちが受験するため、そこでの新しい学びが反映された、新たな切り口や工夫がより一層求められる。最後に、今年度は変化する世界情勢を考慮して、変化が予想される地域に関する出題が大幅に制限されていたが、そうした中でも、現代の諸課題については、多様な視点に基づく出題を求めたい。日々、変化する国際情勢に関心を持つ生徒にとって、そこでの学びが入試問題に直結する面白さが実感できれば、より深く主体的な学びとなるに違いない。今後も、ぜひとも意欲的な出題を意識して、良問を世に問うてほしい。

## ② 全国地理教育研究会

(代表者 高橋 基之 会員数 約300人)

T E L 03-5802-0201

### 地理A・地理B

#### 1 前 文

平均点は、本試験と比較して「地理A」で低め、「地理B」でほぼ同程度と思われる。追試験の受験者が増加している中では、難易度の調整は慎重にお願いしたい。全体としては、これまでのセンター試験や共通テスト同様、高等学校までの学習内容に概ね沿った小問が圧倒的に多く、学習範囲を逸脱した難問や奇問はほとんどみられなかった。また、詳細な事項を前提とするような問いも少なく、ほとんどの小問は、高等学校までの学習で身に付けた基礎的な事項を基に、地理的技能や見方・考え方をを用いて考察するものであった。

#### 2 地理Aへの評価

追試験においても、各小問に図や表、写真などを含めた豊富な資料が提示され、それらの資料が提示されず文だけが提示された小問は30問中4問にとどまった。また、組合せ選択の小問が今年度も、30小問中16問を数え、本試験同様解答には多くの時間を要した。しかし、基礎的な知識・理解をもとに思考・判断する学習の過程を意識した問いが多く、また、細かな知識レベルを前提とした難問もほとんどなく、概ね適切なレベルに作問されており、そうした点への評価は高い。平均点は、本試験よりも低めと思われる。本試験、追試験ともこれ以上の難化がみられないようお願いしたい。

**第1問 「地理的技能とその活用、および日本の自然災害と問題」** 大問のタイトルが、本試験の「地理的技能とその活用、および日本の自然環境や自然災害」から変化した。追試験では、本試験よりもより防災を意識したということだろうか。先日発表された新課程に向けた「地理総合」の試作問題の大問においても、防災が前面に打ち出されていた。残り1年となった来年度の旧課程最後の共通テストにおいても、防災は主要なテーマになると考えられる。追試験では本試験に次いで地図投影法に関する小問が出題され、他にも等高線の読み取りなど、これまでのセンター試験でも繰り返し出題されてきた基礎基本となる知識について問うたものが多かった。また、提示された図や写真から判断すれば正解が得られる地理的な技能や見方・考え方を問うたものが見られたことなど、受験者には優しい大問であったと考えられる。今後もこうした大問の作成を望みたい。

問1 地理的技能としてセンター試験では定番であった地図投影法に関する小問で、難易度は易。本試験がメルカトル図法で、追試験が正距方位図法という、定番の組合せが復活した印象。

問2 地理院地図で作成された陰影起伏図の読み取りに関する小問。内容的には氾濫原の地形と土地利用について問うもので、これも易。

問3 地形図の読み取りに関する小問。定番の地形図における尾根と谷の等高線の描かれ方の違いの理解を問うもので、難易度は標準的。

問4 地震の特徴や被害、対策について述べた文の4つの下線部の中から適当ではないものを選択する小問。緊急地震速報は、事前の余地ではなく地震の発生直後に発せられることを問

うており、難易度は比較的高い。

問5 海に面したある地域について危険度の高低が示された3つの図が、いずれの自然災害のものかを判断する組合せ選択の小問。陰影起伏図を参考にそれぞれの自然災害の発生しやすい地域を考察する問で、地理的技能や見方・考え方を問う良問としたい。難易度は標準よりもやや高い。

問6 日本の自然環境や自然災害に対する備えについての組合せ選択の小問。示された写真から文で提示されたいずれのものに対する備えかを判別するもので、難易度は標準的。

**第2問 「世界の生活・文化」** 資源・産業についての色彩が濃かった本試験と比較すると、いわゆるオーソドックスな生活・文化が扱われた大問で、追試験の方が大問タイトルに相応しい。しかし、やや細かな知識理解を問う小問が複数みられ、難易度は標準より高かった。また、適当でないものの文が明確に誤りなのかどうか疑問が残る問いがみられるなど、大問の出来に関しては、良い出来とは言えない。

問1 キャプションのない各地の伝統的楽器の演奏や儀式に関する写真と図中の3地点との組合せ選択の小問。いずれも特徴的な写真で難易度は標準的であるが、イの写真から東南アジアの熱帯地域を想起することはやや難しい。

問2 アイルランドとアラスカの住居に関する文の下線部の中から適当でないものを選択する小問。凍土地帯での高床式住居の目的について誤るもので、比較的易。

問3 アフリカの宗教に関する小問で、標準的な難易度。宗教の分布についての2択と他地域との往来に用いた風に関する2択の組合せ選択。異なる二つの内容を一つの小問で問う4択で、このような問い方は受験者への負担が大きい。

問4 ベトナムのバインミーに関する小問。写真に示されたパンがフランスパンでありフランスの影響を受けたものであることは容易に解答できる。しかし、調味料がトマト由来のものか魚由来のものかは詳細な知識を問うており、難易度は高く改善の余地がある。

問5 観光に関する統計が示された表中の3か国を判別する組合せ選択の小問。国際観光収支からスペインの判別は容易であるが、国際観光収支の赤字額が大きく隣国であるスイスからの宿泊者が多いPをドイツと判別する点は、これも難易度が高い。

問6 時差を利用した経済・余暇活動に関する小問。適当ではなく正解となる④は、サマータイムに関するもので時差に関したものとは言えない。また、サマータイムによって消費電力が抑制されているかどうかの判断は極めて難しい。①～③の文が適当であることから④を誤りの文と判断した受験生が多かったのではないだろうか。改善の余地が多い小問としたい。

**第3問 「東南アジア」** 東南アジアを対象とした地誌的な大問で、地形や気候、産業、生活・文化などから出題され、東南アジアを地誌的に概観するものとなっている。しかし、思考・判断の場面が少なく、易しいとは言えない知識・理解に頼って正解を導く小問が並んだ印象で、特に後半の2問は難易度も高く、内容的にも「地理B」に相応しい。問5は、2016年の「地理A」本試験に出題されたものに、GDPに占める石油収入の割合を加えて4枚の図から選択させるもので、過去問の出題と言えらる。

問1 図中の3地点における時期別に示された降水量のグラフと、3地点が属する気候区の植生が示されたイラストをそれぞれ判別し組合せて解答する小問。図中には3地点が示されたものの、気候区の植生は3つではなく2つしか示されなかった点には疑問が残る。また、A地点とB地点の降水量に関するグラフの判別は、易しくはない。

問2 図中に示された地域に関する文の4つの下線部の中から適当でないものを選択する文選の小問。誤りの下線部が容易に判断でき易問であるが、インドネシア最大の人口を擁する

ジャワ島を図中で特定することは、地理Aとしては難易度が高い。またマラッカ海峡を西アジアと東アジア（そうでなければインド洋と太平洋）ではなく、南アジアと東アジアをつなぐ海上交通の要衝とした点についても、歴史的なものではなく現代を扱うものとしては、やや疑問が残る。

問3 図中の3地点と各地点での代表的農産物の写真との組合せ選択の小問。ベトナムでの栽培が盛んなものとして取り上げられたコーヒーの写真は分かりづらく、キャプションの必要性を強く感じる。難易度は標準的。

問4 表で示された各国の宗教に関する祝祭日がいずれの国に当たるか判別する組合せ選択の知識・理解に偏った小問で、標準的な難易度。

問5 4つの階級区分図について東南アジアの産業に関する4つの指標のいずれに当たるかを判別する小問。それぞれの階級区分図に特色は現れているので正解を得ることはできるが、難易度は高く時間も要する。「地理B」の地誌に相応しい問と考えられる。

問6 東南アジア各国の輸出依存度の大小と人口の多少を組み合わせる4分した表中に当てはまる国のグループを判別する小問。各国の人口の多少と産業の特色についての概観が必要で、難易度は高い。

**第4問 「都市への人口集中とそれに伴う課題」** 本試験同様第4問が、探究的な学習の場面を想定した大問となった。地球的課題はそうした大問が作りやすい分野であるが、追試験と本試験とは異なる大問で作成し、日常の探究的な学習の手本となるようなものを多くの分野で提示して欲しい。難易度としては、問3以降易問が続いた。そのため、全体の難易度も低く、他の小問や大問に費やす時間を増やすことが出来たと考えられる。こうした大問が増加すれば、時間をかけての思考・判断を要する小問に対して時間に余裕をもって取り組むことができることとなり、望ましい。

問1 都市人口に関する統計が示された表中の3か国を判別する組合せ選択の小問。定番の問で、難易度も標準的。

問2 日本の大都市圏の発達過程において生じる問題についてモデル図を示して問う小問。内容的にはスプロール現象についての理解を問うている。設問文や表示されたモデル図をみながら思考・判断するもので、工夫された問となっている。難易度は標準的。

問3 東京とマニラを比較した文中の3つの下線部の正誤をそれぞれに判断する8択の組合せ選択の小問。判断に迷うものはなく易。

問4 先進国における交通渋滞の解消への取組に関して述べた文の中から適当でないものを選択する小問。この問いも誤りが明確で易。

問5 ジャカルタの交通渋滞の実態と対策について提示された図と表を見ながらの会話文に引かれた下線部の誤りを選択する小問。これも誤りが明確で易問であるが、複数の資料と会話文を照らし合わせる必要があり、解答には時間を要する。

問6 人口集中に伴う都市問題の授業の最終場面を想定した発表ポスターの空欄に当てはまる二つの語句についての組合せ選択の小問。この問も易。

**第5問 「高知県須崎市周辺の地域調査」** さまざまな資料を読み取りながら思考・判断していく地域調査らしい大問。難易度は低いが、資料提示数がやや多く解答に時間を要したと思われる。問2、問3において、地形図や地理院地図等を用いての地形や、地域の変容に関して読み取る地理的技能についての出題がみられたことは歓迎したい。また問1、問6のように、考察する範囲を地域調査の対象地域よりも広げたものがみられた点についても歓迎したい。

問1 高知県と香川県から4都府県への移動交通手段の違いに関する組合せ選択の小問。基礎

的知識をもとに提示された資料について思考・判断する定番のものだが、高知県と香川県について問うており、難易度はやや高い。

問2 地理院地図とGoogle Earthにより作成された地図の読み取りについて適当でない文を選択する小問。地形に関する読み取りで、難易度は標準的。

問3 ニホンカワウソの絶滅の要因をまとめた資料と新旧地形図をみながら、会話文の下線部の中から適当なものを選択する小問。設問文が7行と長い上に、探究的な学習場面の設定には必要とは言え新旧地形図の読み取りとの直接の関係はない資料が提示されている。難易度は低いものの、いたずらに解答時間を増加させる問の形式であり、評価は低い。

問4 提示された図と表を読み取って述べた4つの文から適当でないものを選択する小問で、図を丁寧に読み取って考えれば易。

問5 写真で提示された4つの津波に対する対策事例の目的について示された文の中から誤りを含むものを選択する小問で、難易度は低い。

問6 アライグマとカモシカの生息分布を示した地図とそれに関する会話文についての小問。2つの異なる事項についてそれぞれ判断し選択する2×2の4択問題だが、難易度は低い。取り上げられた内容は興味深いが、この問も設問文、分布図、会話文、取組の具体例が2ページにわたり示され解答に時間を要する。

#### 4 「地理B」について（地理Aとの共通問題を除く）

大問構成と内容については、本試験と同様であった。追試験でも、図や写真、グラフ、表などの資料が豊富で、組合せ選択の小問も15問を数え、解答に多くの時間を要した。しかし、作り込み過ぎたと思われるような共通テスト初年度の自然環境を扱った第1問のような大問はみられなかった。全体を通して解答そのものに迷う難問はほとんどみられず、平均点もほぼ本試験並みと思われる。しかし、成績上位層が高得点を取りにくい状況に変化はなく、来年度以降の改善を是非お願いしたい。

**第1問 「世界の自然環境と自然災害」** 大問タイトルは本試験と同様で、世界図が用いられなかったことも同様であった。本試験では「災害」に重点が置かれたが、追試験では災害について問われた小問は1つだけであった。問2、問4は意欲的な作問であるが、その分受験者を悩ませ、正答率も低く、大問全体の正答率もやや低いと思われる。

問1 ユーラシア大陸とその周辺の4地点と表中に示された4地点の降水量に関する統計との組合せ選択の小問。気候に関する定番の内容で、難易度も標準的。

問2 サヘル地域の内陸河川に関する小問。河川の流下方向についての2択と河川流域での環境問題についての2択で4択となる組合せ選択の小問。これまで得た知識・理解をもとに提示された図から思考・判断する見方・考え方を問う工夫された問とは思うが、赤道に近く雨季が長い南側が上流で、雨季が短くサハラ砂漠に近い下流側の湖で消失することについての正解率は、非常に低いと思われる。

問3 3地点における侵食速度について示された表と3地点の状況を説明した文との組合せ選択の小問。安定陸塊で過去からの侵食速度が遅く、森林伐採により現在の侵食速度が早いことを問うもので、題材の選び方に工夫がみられる。難易度は、やや高い。

問4 熱帯付近の4つの区域における熱帯低気圧の移動経路と主な移動方向を判別する小問。P、Sとして示された南半球側の二つの区域の違いの判別は、寒流の存在により判別が可能であるが、解答を求められた北半球側の二つの区域の判別は、難易度が非常に高い。フィリピン側に近い西の区域の方が熱帯低気圧の発生が多いことを、その理由とともに理解してい

る受験者の割合はどの程度だったのだろうか。

問5 日本の3地点における河川流量の月別変化を判別する組合せ選択の小問。問1と同様、定番の内容で難易度も標準的。

問6 陰影起伏図と地形分類図が示された地域における災害の危険性の高低についての小問。地形図と地形分類図から防災について考察する形式は、第1回試行調査でみられており、今後は定番化していく可能性は高いと思われる。難易度は標準的。

**第2問 「資源と産業」** 昨年度は、本試験においても追試験においても特定の分野からの出題で、今年度本試験も、大問タイトルこそ「資源と産業」であったが、本試験も追試験も内容的には第1次産業に偏ったものであった。受験者のこれまでの学習に応えるためにも、産業の各分野からの出題を望む声は大きい。冒頭の問1、問2において世界図が用いられたことは歓迎したいが、問1では日本やオーストラリアを中央としたもの、問2ではヨーロッパやアフリカを中央としたものとなっている。問1の世界図においても、ヨーロッパやアフリカを中央としたものの利用で差し支えないと考えられるが、連続した小問において変化させている理由はあるのだろうか。学習の際に、どのような図法を、どこを中央や中心において作成し考察するかは、地理的スキルや見方・考え方に強く関わるものであり、十分に意識しての作問を願いたい。

問1 鉱産資源である鉄鉱石、ボーキサイトと工業製品である粗鋼とアルミニウムの産出と生産に関する小問。定番の内容で、難易度も標準的。

問2 ツナ缶詰の生産量と輸出量に関する統計図について述べた文の下線部の中から適当なものを選択する小問。初見の図ではあるが、図を丁寧に読み取って考えれば難易度は低い。

問3 水産業に関する小問。南米のイワシ漁と東南アジアのエビ養殖への理解を問うもので、難易度は標準的。

問4 4か国の米の栽培カレンダーに関する小問。小麦カレンダーにおける見方・考え方の応用を求めたもので工夫されている。難易度は標準的。

問5 地域別の穀物の輸出量と輸入量について示した図から輸入量と北アメリカを判別する組合せ選択の小問。難易度は標準的。

問6 固定電話と携帯電話の普及率に関する小問。定番の内容で、難易度も標準的。

**第3問 「日本の人口や都市」** 本試験と同じく「日本の人口と都市」を主題とした探究的な学習を想定した大問。本試験では日本に特化した問いが多く、都市に関するものが多かった。追試験では、日本と他国・他地域を比較して問うものが多く、都市に関する問いは問6だけであった。日本と世界、人口と都市のそれぞれにバランスの取れた作問が期待される。また今年度も第3問においては、生活・文化に関わる問いは出題されなかった。

問1 3か国の人口ピラミッドの変化と出生率・死亡率の変化を示したグラフについての組合せ選択の小問。設問中では国名が明らかにはされない3か国について、日本に当てはまるものが明示された中で考察させるもので、見方・考え方を問う工夫されたものとなっている。難易度は標準的。

問2 日本を含めた4か国の人口の社会増加率の推移を示したグラフから国名を判別する小問。4か国それぞれに特色がみられ判別しやすい。難易度は標準的。

問3 合計特殊出生率について述べた4つの文から誤りを含むものを選択する小問で、この問も難易度は標準的。

問4 3か国の社会保障負担率と租税負担率を示した表に関する組合せ選択の小問。デンマークの租税負担率は高いものの社会保障負担率が非常に低く判別しにくい。そのため、比較的難易度は高い。

問5 都道府県別に階級区分図で示された人口や都市に関する三つの指標の組合せ選択の小問。学習する機会が少ないと考えられる夫婦共働き世帯の割合と単独世帯の割合の判別は、難易度が高く改善の余地がある。

問6 保育所の整備に関する小問で、取り上げた内容は時機にかなったもので評価できる。形式は資料を読み取っての会話文中の下線部の中から誤りを選択するもので、難易度は低い。

**第4問 「地中海周辺の地域」** 本試験のインドと中国に対して、追試験では地中海を囲む北アフリカ、西アジア、ヨーロッパが出題された。いずれも過去に多く見られた標準的な地域区分とは異なるもので、今後も、さまざまに区分された地域からの出題がみられるのかもしれない。また、Bパートとしてスペインとチュニジアの比較地誌が出題された。現行課程最後となる来年度の共通テストにおいても、何らかの形で比較地誌の小問が設定されるのではないだろうか。内容的には、学習機会の少ない北アフリカや西アジアについての理解が必要なものが多かった。そうした地域を扱う際には、個別の国に対する知識ではなく、地域全体に対する概観に基づき思考・判断が可能な問の作成が望まれる。

問1 地中海周辺の3つの自然エネルギーによる発電施設の分布についての組合せ選択の小問。分布の違いが明確で解答しやすい。難易度は標準的。

問2 モロッコのトマト栽培と輸出に関するグラフについての説明文中の下線部の中から適当でないものを選択する小問。グラフからは判断できず説明文から類推しての判断を求められる選択肢もあるが、グラフの読み取りから判断できるもので誤っており、難易度は低い。

問3 3か国の自動車の人数当たり輸出台数を示したグラフに関する小問。スペインの判別は容易であるが、輸出がみられないイスラエルと経済水準が低く人数当たり輸出台数の少ないモロッコとの判別は、イスラエルについての自動車産業に関しての学習機会が少なく難易度は高い。

問4 北アフリカ・西アジア各国に対してのフランスとイギリスからの観光客数と国際援助額とを示した図に関する小問。フランスと旧フランス領とのつながりと、アフガニスタンとイエメンの経済水準の低さが判別の根拠となるもので、これも難易度は高い。

問5 セビリアとチュニスの都市景観が提示された資料について述べた文の下線部の中から適当でないものを選択する小問。資料を読み取るだけで判断できるものと、両都市が含まれる地域に関する知識・理解を必要とするものが混ざる。適当でないものは写真から判断でき、難易度は低い。

問6 両国の産業別男女別就業人口割合に関する小問。第2次産業から第3次産業への移行とイスラム圏の女性就業者比率についての理解から正解を得られ、標準的な難易度。

**第5問 「高知県須崎市の地域調査」** 第5問の評価は地理Aでの記述の通り。

#### 4 総評・まとめ・要望

大問数は、「地理A」も「地理B」も5大問で本試験からの変更はなかった。また解答数は、「地理A」、「地理B」ともに、1つの小問を2つに分割したものはみられず、6小問ずつの5大問という構成であった。豊富な資料と組合せ選択の小問の多さなどにより、本試験と同様に解答時間はぎりぎりで見直す余裕はなかったと思われる。小問数のさらなる削減を切望したいが、少なくとも今年度の小問数が維持されることを望みたい。

各小問においては、これまで同様さまざまな資料が豊富に示され、中には複数の資料を照らし合わせる必要がある小問もみられた。そうした中で、文章のみの小問は、「地理A」では4小問、「地理B」においては1小問しかみられず、解答に時間を要した。

さまざまな資料の中でも世界図を用いた小問は本試験以上に少なく、「地理A」では正距方位図法の小問のみで、「地理B」においては、鉄鉱石と粗鋼、ボーキサイトとアルミニウムに関する小問と、ツナ缶詰に関する小問の2小問のみであった。現代世界の諸事象を世界的な視点で理解したり、世界を大観する中で地域の特徴を考察したりするという視点は重要であり、世界図を提示したなかでの問題作成の増加が望まれる。

解答に時間を要する原因の一つである「組合せ選択」の形式は、今年度も「地理A」で16小問、「地理B」で15小問出題されたが、追試験では本試験にはみられなかった8択が「地理A」で1小問みられた。また「組合せ選択」の中でも、当てはまる図とともに文中の空欄に適語を入れるなど、複数の事項についてそれぞれ判断し選択する $3 \times 2$ の6択や $2 \times 2$ の4択となっているものは、「地理A」で6小問、「地理B」でも6小問みられた。安易に「組合せ選択」の小問を多用することがないよう強く要望したい。

最後に、本試験においても追試験においても、雨温図とハイサーグラフは、「地理A」、「地理B」ともに示されなかった。月平均気温や月降水量についてはさまざまな示し方があるが、地理的技能の育成という観点からは、雨温図やハイサーグラフを直接示して、各都市の気候を概観させたり、見るべきポイントを受験者に直接読み取らせたりした上で考察させる小問が作成されてもよいのではないだろうか。